

# 宮本百合子選集

第四卷

新日本出版社

# 百合子選集

## 第四卷

新日本出版社

宮本百合子選集 第四卷

---

1969年2月25日 初 版

1974年11月15日 第7刷

著 者 宮 本 百 合 子

発行者 松 宮 龍 起

---

郵便番号 102 東京都千代田区富士見 2 の13 の14

発 行 所 株 式 会 社 新 日 本 出 版 社

電話 東京 (265) 7006 (営業)

(265) 2075 (編集)

振替番号 東京 1 3 6 8 1

印刷・壮光舎印刷 製本・古賀製本

---

落丁・乱丁本はおとりかいたします

目次

|      |     |
|------|-----|
| 播州平野 | 3   |
| 風知草  | 135 |
| 二つの庭 | 193 |
| 注    | 439 |
| 解説   | 445 |
| 戸台俊一 | 473 |



播  
州  
平  
野



一

一九四五年八月十五日の日暮れ、妻の小枝が、古びた柱時計の懸っている茶の間の台の上に、大家内の夕飯の皿をならべながら、

「父さん、どうしましょう」

ときいた。

「電気、今夜はもういいんじゃないかしら、明るくしても——」

茶の間のその縁側からは、南に遠く安達太郎連山が見えていた。その日は午後じゅうだまって煙草をふかしながら山ばかり眺めていた行雄が、

「さあ……」

持ち前の決して急がない動作でふり向いた。そして、やや暫く、小枝の顔をじっと見ていたが、

「もうすこし、このまんまにして置いた方が安全じゃないか」

と云った。

「——そうかもしれないわね」

小枝は従順に、そのまま皿を並べつづけた。

台の端に四つになる甥の健吉を坐らせ、早めの御飯をたべさせていたひろ子は、この半分息をひそめたような、驚愕から恢復しきれずにいる弟夫婦の問答を、自分の気持にも通じるところのあるものとしてきいた。

東北のその地方は、数日来最後の炎暑が続いていて、ひどく暑かった。粘土質の庭土は白く乾きあがって深い亀裂が入った。そして毎朝五時すぎという紺碧の燦く空から逆落しのうなりを立てて、大編隊の空襲があった。

前夜もその前の晩もそうであったように、八月十四日の夜は、十一時すぎると空襲警報が鳴り、午前四時すぎ迄、B29数百機が、幾つもの編隊となって風のないう夏の夜空をすきまもなく通過した。おぼつかないラジオの報道は、目標は秋田なるが如しと放送していたが、それを信じて安心しているものは一人もなかった。富井の一家が疎開してきて住んでいる町の軍事施設や停車場が猛烈な空爆を受けたとき、空襲警報のサイレンは、第一回爆撃を蒙って数分してから、やっと鳴った始末であった。

十四日の夜は、行雄とひろ子とがまんじりとしな

いで番をした。壕に近い側の雨戸は、すっかりくり開け、だまって姉弟が腰かけている縁側のむこうには、おそく出た月の光で、ゆるやかに起伏する耕地がぼんやり見えた。米軍機の通過する合間を見ては、町の警防団が情勢を連呼していた。そのなかに、一つ女の声が交って聞えた。細いとおる喉をいっばいに張って、ひとこと、ひとこと、「てーきは」と引きのばして連呼する声を聴いていると、ひろ子は悲しさがいっばいになった。低く鶯がこめている藜畑の上をわたって、大きい池のあちちから、その女の声はとぎれとぎれにきこえた。責任感でかすかにふるえているかと思うその中年の女の声は、ひろ子に、田舎町のはずれに在る侘しいトタン屋根の棲居を思いやらせた。古びた蚊帳の中で汗をかきかき前後不覚に眠ってしまった何人かの子供らの入り乱れた寝相と、一人の婆さまの寝顔が思ひやられた。その家には、たしかに男手が無いのだ。三人の子供をつれて小枝が横になっている蚊帳をのぞくと、どんなに足音を忍ばせて近づいても必ず小枝は、

「どう？ 御苦労さまね」

と、おとなしく、心配にみちた声をかけた。

「父さんもういるの？ 今夜は、なんて、どっさり来らんでしょう」

いざというとき子供たちを抱え出す足許をやっと照すだけの明りが、用心深くかこわれて、小枝の枕頭に置いてある。蚊帳の青味と隅の濃いその灯かげの陰翳とで、美しい小枝の小鼻は、白い枕被いの上で嶮しくそげて見えるのであった。

最後の編隊が、耕地の表面の土をめくり上げるような轟音をたてて通過した。そのあとは、いくら耳をすましてももう空は森としていて、ひろ子は急に体じゅうの力がぬけてゆくのを感じた。

「――すんだらしいわね」

もんべ姿の小枝が蚊帳からにじり出て来て、さもうるさそうに頭をふり、顎のまわりから防空頭巾の紐をといた。行雄は、靴ばきで踏石の上に立ったまま、煙草に火をつけた。行雄は最初の一服を深く、深く、両方の頬べたをへこますほど長い息に吸いこんだ。

十五日は、おそめの御飯が終るか終らないうちにサ

イレンが鳴った。

「小型機だよ！ 小型機だよ！」

十二歳の伸一が亢奮した眼色になって、駆けだしながら小さい健吉の頭に頭巾をのせ、壕へつれて入った。三日ばかり前この附近の飛行場と軍事施設とが終日空爆をうけたときも、来たのは小型機の大編隊であつた。

「母さん、早くってば！ 今のうち、今のうち！」

小枝が病弱な上の女の児を抱いて一番奥に坐り、一家がぎしりよりかたまっている手掘りの壕の上には夏草が繁っていた。健吉が飽きて泣きたい顔になると、ひろ子はその夏草の小さい花を採って丸い手に持たせ、即席のおはなしをきかせるのであつた。この日は、三時間あまりで十一時半になると、急にびたりと静かになった。

「変だねえ。ほんとにもういないよ」

望遠鏡をもって、壕のてっぺんからあちこちの空を眺めながら、伸一がげげんそうに大声を出した。きのうまでは小型機が来たとなつたらいつも西日が傾くまで、くりかえし、くりかえし襲撃されていたので

あつた。

「珍しいこともあるものねえ」

「昼飯でもたべにかえつたんだらう。どうせ又来るさ」

そんなことを云いながら、それでも軽いころもちになつて、ぞろぞろ壕を出た。そして、みんな茶の間へ戻つて来た。

「御飯、どうなさる？ 放送をきいてからにしましうか」

きょう、正午に重大放送があるから必ず聴くように、と予告されていたのであつた。

「それでいいだらう、けさおそかったから。——姉さん、平気かい？」

「わたしは大丈夫だわ」

伸一が、柱時計を見てラジオのスイッチ係りになつた。やがて録音された天皇の声が伝えられて来た。電圧が下っていて、氣力に乏しい、文句の難かしいその音声は、いかにも聴きとりにくかつた。伸一は、天皇というものの声が珍しくて、よく聴こうとしきりに調節した。一番調子のいいところで、やっと文句がわか

る程度である。健吉も小枝の膝に腰かけておとなしく瞬きしている。段々進んで「ポツダム宣言を受諾せざるを得ず」という意味の文句がかすかに聞えた。ひろ子は思わず、縁側より居た場所から、ラジオのそばまで、にじりよって行った。耳を押しつけるようにして聴いた。まわりくどい、すぐに分らないような形式を選んで表現されているが、これは無条件降伏の宣言である。天皇の声が絶えるのとすぐ、ひろ子は、「わかった？」と、弟夫婦を顧みた。

「無条件降伏よ」

続けて、内閣告諭というのが放送された。そして、それも終わった。一人としてものを云うものがない。やああって一言、行雄があきればてたように呻いた。

「——おそれいったもんだ」

そのときになってひろ子は、周囲の寂寞におどろいた。大気は八月の真昼の炎暑に燃え、耕地も山も無限の熱気につつまれている。が、村じゅうは、物音一つしなかった。寂として声なし。全身に、ひろ子はそれを感じた。八月十五日の正午から午後一時まで、日本じゅうが、森閑として声をのんでいる間に、歴史は、

その巨大な頁を音なくめくったのであった。東北の小さな田舎町までも、暑さとともに凝固させた深い沈黙は、これ迄ひろ子個人の生活にも苦しかったひどい歴史の悶絶の瞬間でなくて、何であつたらう。ひろ子は、身内が願えるようになって来るのを制しかねた。健吉を抱いたまま、小枝が縁側に出て、そっと涙を拭いた。云いつくせない安堵と気落ちとが、夜の間も脱ぐことのなかった、主婦らしいそのもんべのうしろ姿にあらわれている。

伸一が、日やけた頬をいくらか総毛立たせた顔つきで父親の方からひろ子へと視線をうつした。

「おばちゃん、戦争がすんだの？」

「すんだよ」

「日本が敗けたの？」

「ああ。敗けた」

「無条件降伏？ ほんと？」

少年の清潔なおもてに、そのことは我が身にもかかわる屈辱と感ずる表情がみなぎっているのを見ると、ひろ子はいじらしさと同時に、漠然としたおそれを感じた。伸一は正直に信じていたのだ、日本が勝つもの

だと。——しばらく考えていてひろ子は甥にゆっくりと云った。

「仲ちゃん、今日までね、学校でもどこでも、日本は勝つとばかりおそわったろう？ おぼちゃんは、随分話したいときがあったけれど、仲ちゃんは小さいから、学校できかされることと、うちできくことと、余り反対だと、どっちが本当かと思って困るだろうと思ったのさ。だから黙っていたのよ」

戦争の十四年間、行雄の一家は、初めから終りまで、惨禍のふちをそーと廻って、最小限の打撃でさけとおして来ていた。主人の行雄が、本人にとつては何の不自由もない些細な身体上の欠点から、兵役免除になっていた。それが、そういう生活のやれた決定的な理由であった。所謂平和建設の建築技師である行雄は経済封鎖にあつてはいた。手元も詰りながら、一般のインフレーションの余波で何とか融通がついて、一年半ほど前から祖父が晩年を送ったその田舎の家へ一家で疎開暮しをはじめたのだった。

戦争中、新聞の報道や大本営発表に、ひろ子が、疑問を感じる折はよくあつたし、野蠻だと思ったり、悲

慘に耐えがたく思ったりすることがあつた。ひろ子の氣質で、そのまま口に出した。行雄は、それもそうだねえと煙草をふかしている場合もあつたし、時には、姉さんは何でも物を深刻にみすぎるよ。僕たちみたいのものは、結局どうする力もないんだから、聞かされるとおり黙って聞いていれやいいんだ。そう云って、眼のうちに暗い陰しい色をうかべる時もあった。戦争が進むにつれて、行雄の気分はその面がつよくなった。行雄のそういう気持からすれば、息子がきかされる話についても神経の配られるのを感じて、ひろ子は、たくさん云いたいことを黙って暮して来たのであつた。十五日は、そのままひるから夕方になり、やがて夜になつても、村じゅうの麻痺した静けさは変らなかつた。

翌日、ひろ子は余り久しぶりで、却って身に添いかねる平和な明るさの中でもんぺをぬぎ、網走の刑務所にやられている良人の重吉へ、たよりを書きはじめた。ひろ子が小娘で、まだ祖母が生きていた時分、祖父の遺愛の机として、赤銅の水滴だの支那焼の硯屏だのが、きちんと飾られていたその机の上には、今こ

で生活している若い親子たちの賑やかでとりまとまりのない日々を反映して、伸一の空襲休暇中の学習予定の下手なプリントや、健吉が忘れて行ってしまった玉蜀黍の嚙りかけなどがころがっている。

ひろ子は、少し書いては手を止めて、考えこんだ。

網走<sup>\*</sup>の高い小さい窓の中で、重吉は、きっともう戦争の終ったことを知っているだろう。十二年の間、獄中に暮しつづけて来た重吉。六月に、東京からそちらへゆく前、面会所の切り窓から「まあ半年か、長くて十カ月の疎開だね」と云って笑った重吉。その重吉こそ、どんな心で、このニュースをきいたであろう。ひろ子は、こみ上げて来る声なきかちどきで息苦しいばかりだった。

この歳月の間に、ひろ子は検閲のある手紙ばかり千通あまりも書いて来た。いつか変通自在な表現と、お互いのわかりあいが出来て、自然の様々な景観の物語などのうちにも、夫と妻との微妙なゆきかきがいこめられるようになっていたのだった。手紙をかき出して、ひろ子は、いつか習得させられた自分の気の毒なその技術を、邪魔なばかりに感じた。ひろ子は、はっきり、

それこそその手紙の眼目としてききたいことがあった。たった一行それだけ書けばいいということがあった。しかし、まだ、其は書けまい。いつお帰りになるでしょう。書きたい言葉はその一行である。ほんとに、重吉はいつ帰れるだろうか。

この十四年ほどの間に、日本の治安維持法は、ナチスの予防拘禁所のシステムまで輸入して、息つくすきも与えないものとなって来た。狭い日本に張りつめたこの重石は、先頃発表されたポツダム会議の決定によれば、直ちにとりのぞかれ、粉砕されるべきものとして示されている。支配者たちは、自分たちのこんな敗北さえも、野良や工場に働く人々には、すぐのみこめないような云いまわしであらわした。そこには、何処かで、出来る丈握っている縄の端を手離すまいと腐心している陰險さがうかがわれるのであった。治安維持法を、どういうやりかたで、どんな範囲で、彼等は処理しようとするのだろうか。

ひろ子の書く手を止めるのは、この点について、経験した者でなくては想像しにくい程の苦しい不安と警戒とであった。一言、うれしい、という率直な表現を

もつことさえも、重吉への手紙の中では安心できなかった。妻であるひろ子の、打ちひろげすぎた感情が、生きるために最小限の条件を確保するためにさえ、根柢よく闘わなければならぬ重吉の体に、見えないところできめんな意地わるい仕打ちとして返されて行くようなことがあつてはならない。こうして綴る一行のうちに、身もだえのように、脈搏つ心のうねりがある。いがぐり頭になつて、煉瓦色の獄衣を着て、それでも歴史の前途はいとど明るし、という眼色でいる重吉は、このうねる熱さを彼の掌のなかにうけとつた時、自分たち二人が時間と距離とにへだてられつつ、結ばれて生きて来た年月を何と顧るだろう。にわかには急な斜面が展けたような今日の感動を、重吉もぐっと、その胸でこたえている。それが、まざまざと感じとられるのであつた。

ひろ子が机に向つてゐる障子の外は、つい一昨晩まで、夜じゆう恐怖のうちに開け放されてゐた縁側である。いくつもの風呂敷包。リュックサック。食糧を入れた石油カン。そういうものが、まだほっぽり出されたまんま、そこにあつた。雨戸が一二枚ひき残されて

いて、その節穴から一筋矢のように暑い日光が薄暗がり射し込んでゐる。亀の子に細引をかけた小型の行李が、丁度その光の矢を浴びてゐる。

自分も重吉のいる網走へ行って暮そう。文筆上の自由職業をもつてゐるひろ子が、そう決心したのは、七月下旬のことだつた。何も知らずに、巢鴨宛に書いた重吉への手紙が、網走へ本人を送致したからという役所の附箋つきで戻されて来た。粗末な紙片に、にじむインクで書かれた網走という文字を見たとき、ひろ子は、自分の生きて来た張合が、すーと、遠くへ引き離された感じがした。網走というところは、名前ばかりで知つてゐる。そこへやられた重吉と自分との間には、狭い日本の中ながら幾山河が在る。空襲が益々苛烈になり上陸戦の噂もあつたその頃の事情で、この幾山河は、場合によつては、二人の間が何年間か全く遮断されるかもしれないという心配をもたらしした。

ひろ子は、そこで暮してゐた東京の弟の留守宅の始末を全速力で片づけて、ともかく東北のこの町へ来た。そして小一里ある停車場や交通公社へ行って津軽海峡を渡る切符が買えるのを待ちながら、旅の仕度を

した。

ひろ子のいるところでさえ八月になれば、山々の色が変化した。網走には、もう秋の霧が来ているだろう。オホーック海からの吹雪が道を塞ぐ前に、せめて北海道まで渡りたい。ひろ子は寒いところでの暮しに役立ちそうな物を選んで、夏の西日の下で小さい行李につめた。知り合いというようなものもないそこで、どんな生活が出来るのか見当もつかなかった。保護観察所の役人は、くりかえし、ひろ子が行った先で人と交際することを禁じた。もうその頃、海を渡る旅行は体一つでさえ困難になっていた。道具めいた何一つも持っては行けない。それでも、棲むところは網走ひとつに思いきめて、ひろ子は青森が空襲をうける度に、あら、またよ、と歎息した。青森市は焼かれ、連絡船の大半が駄目になったのであった。

切符が手に入れば、明日にもそちらへ行くと書いた手紙を封筒に入れながら、ひろ子は、ほんとに、この行李が海をこえるのかしらと思った。東京の親切な知人が、つての網走へゆくときめたひろ子を思いやっ

って、すこし離れた都会にいる或る人に、紹介をたの

んでくれた。待ちかねるほどたつて返事が来た。ハガキにせわしい字で、当地も昨今は空襲を蒙るようになった。知人も疎開したり死亡したりしていて御希望に添うような便宜は得にくい、御主人によくお話しになり、御渡道はお見合わせになるが然るべく、という意味が書かれていた。

「御主人によくお話しになり」——云いつけで、ひろ子が遠いところへ行きでもするように。——懇篤な紳士と云われる人が、身に迫った戦禍に脅えて、浅く迅く視線を動かして身辺を視ている落着かないさまが、ハガキの面に溢れていた。またそこには、一人の女としてひろ子が体から初めて運んでいる面倒な事情も、おのずから影響していると思えた。

実の弟の家へ逗留しているというだけに、町の特高は、同じ頃そこへ用向で訪ねて来た客たちの関係までを、訊きただした。駐在は親切で、お客があるときも、その名と年とを書き出してくれさえすれば、すぐ応急米を渡すから、と小枝に云った。小枝はよろこんで、そのとおりにした。特高が来て、どうして知っているかと思うようなつまらない名をいうとき、それ

はみんな、米とつながる姓名なのであった。どうでしょう！ 小枝は、眉をもち上げて首をすくめた。

それらのあれこれに拘らず、ひろ子は網走へゆこうとしているのだった。

封筒につかう糊をとり立ってゆくと、茶の間に、きき馴れない男の声がした。もう大分酔いのまわった高声で、

「はア、どうも、こういう超非常時でもねえと、思い切ってこちらさアは来にくくてね」

行雄が、それに対して、おだやかに応答している。

「何しろ、もうこうなっちゃあ、酒でも飲むほか、手はねえです。馬鹿馬鹿しいちゃ、話にもなんねえ。いかがです一杯——わしらの酒でも、はあ満更馬鹿にしたもんじゃない、純綿でやすって——ね、旦那、一杯。つき合いちゅうもんだ」

ひろ子は、下駄をはいて、杏の樹の陰から台所へまわった。小枝が、一方に柴木を積み上げた土間に躓んで、茶の間のやりとりに耳をかたむけながら馬鈴薯の皮をむいていた。

「お客？」

こっくりして、小枝が困ったという表情をした。

「だれ？」

「与田の音さん」

町の、統制会社へ出ている男であった。

ひろ子は、小さい健吉をつれて、往還の角にある郵便局へ手紙を出しに行った。いかにも明治になっての開墾村から町に変わった土地らしく、だだっぴろい街道に、きのうまでは軍用トラックとオートバイが疾走しつづけていた。きょうは、そういうものはもう一つも通らない。街道は白っぽく、埃りをため、森閑として人気がなく、おしつぶされたように低い家と家との間にある胡瓜畑や南瓜畑の彼方に遠く三春の山が眺められた。

草道をかえって来ると、茂った杉の木かげの門から、音さんの腕に肩をからまれながら出てゆく行雄のワイシャツ姿が見えた。

十五日から、ラジオは全国の娯楽放送を中止した。武装解除について、陸海軍人に対する告諭、予科練、各地在郷軍人に与うる訓諭、そういう放送が夜昼くり

かえされた。その間に、広島と長崎とを犠牲にした原子爆弾の災害の烈しさと、そのおそろしい威力とについて、解説がきこえた。銀行のとりつけを防ぐため、経済は安定であると告げる放送。食糧事情について安心せよという農林大臣の放送。これからは平和日本、文化国日本を再建せよと命じる文部大臣。ラジオが途切れる間の沈黙にも耐えないという風で、次から次へ、告諭は、ひろ子達のいる田舎の町に鳴りつづけた。どの家でも熱心に、ラジオをかけっぱなしにして聴いていた。が、聴いているそれらの顔に滲んでいるのは、云いあらわすに術のない一種の深いあてどなさ、と疑惑であった。今日までこれ程の思いをさせて、勝つ勝つとひっぱって来た縄を、ぶつ切り切って、力の反動でうしろへひっくり返るということさえもないかのように、別な紐をつき出してさあこんどはこれを握れと云われても、人々はこういう心持がするだろう。

半年ぶりで、富井の家の電燈も煌々として、昔ながらのすすけた太い柱や板の間をくまなく輝かせるようになった。台所の天井に届く板戸棚の前に、大きく丸い漬物石がいつの間にか転がっていたのが、ひょ

っこり目について皆を笑わせたりした。馴れない明るさは、テニス・シャツをブラウス代りに着ているひろ子に、自分の体の輪郭までをくっきり際立って感じさせた。井戸端の電燈がついたので、いつ廊下を通っても閉った雨戸のガラスから、荒れた花壇のある深夜の庭がはっきり見えた。久しぶりの明るさは、わが家の在り古した隅々を目新しく生き返らせたが、同時に、その明るさは、幾百万の家々で、もう決して還って来ることのない一員が在ることを、どんなにくっきりと炉ばたの座に照し出したことだろう。強い光がバツと板の間を走ったとき、ひろ子はよろこびとともにそのことを思いやって鋭い悲哀を感じた。

夜の明るさが、政府放送のたよりなさと拙劣さとを、ひとしおしみじみと感じさせるような雰囲気のうちに鈴木貫太郎内閣が退陣した。そして東久邇の内閣が代った。

## 二

杏の樹の下枝へ結びつけた荒縄の輪と納屋の軒下と